



Data

監督・脚本・製作：ウェイン・クラマー

出演：ハリソン・フォード/レイ・リオッタ/アシュレイ・ジャッド/ジム・スタージェス/クリフ・カーティス/アリシー・ブラガ/アリス・イヴ/サマー・ピシル/ジャスティン・チョン/メロディ・カザエ

👁️👁️ みどころ

島国ニッポンでは不法滞在者問題、移民問題に鈍感だが、ヨーロッパでもアメリカでもそれは深刻。アメリカでは何と1100万人もの不法滞在者がいるらしいが、ハリソン・フォード扮するI.C.E. (移民税関) 捜査官は、そんな彼らの「事情」に対して、どんな「人情」を？ 9・11テロを契機とした大幅な組織再編の結果生まれたのが、I.C.E.。さて、日本では来る8・30総選挙の結果政権交代が実現すれば、国家戦略局はこの問題に対していかなる戦略を？ 本作を契機として、そんな骨太の議論を期待したいが・・・。

* * * * *

ハリソン・フォードが方向転換？

2009年1月に還暦を迎えた私はまだまだ元気で生涯現役を貫くつもりだが、『インディ・ジョーンズ クリスタル・スカルの王国』(08年)における1942年生まれハリソン・フォードのアクションを観ていると、とても「このおっさん(おじいさん?)にはかなわないなあ」と思ってしまう(『シネマルーム20』14頁参照)。また『K-19』(02年)における彼の熱演も私の目に強く焼きついている(『シネマルーム2』97頁参照)。そんなハリウッドを代表する大スターハリソン・フォードが、はじめてメジャースタジオ以外の本作に出演したのはなぜ？ それは、本作の脚本の完成度の高さとテーマ性に惚れ込んだため。つまり本来なら1本あたり〇〇ドルという出演料を無視して、低予算の本作に安い出演料で出演を快諾したわけだ。しかして、ハリソン・フォードは本作をもって、大きく方向転換？

I . C . E . とは？目のつけどころは？

本作の原題は『Crossing Over』だが、これだけでは何のことがサッパリわからない。そこで邦題は『正義のゆくえ I . C . E . 特別捜査官』としたが、そもそも I . C . E . とは一体ナニ？それがわからなければ本作のテーマを理解できないが、朝日、毎日、読売、産経、日経そして大阪日日新聞の6紙を毎日読んでいる私でもそんなものは知らなかったのだから、あなたもそれは知らないのでは？ I . C . E . とは移民税関捜査局のこと。

プレスシートによれば、移民・関税執行局=I . C . E . (Immigration and Customs Enforcement)は、2001年の9・11同時多発テロを契機とした2003年のアメリカ連邦政府の全面的再編に伴って新たに編成された組織。ヨーロッパでも移民問題は深刻だから、それをテーマとした『この自由な世界で』(07年)(『シネマルーム21』247頁参照)や『そして、私たちは愛に帰る』(07年)(『シネマルーム22』138頁参照)などの名作が誕生しているが、移民問題に鈍感で能天気な島国ニッポンでは、なかなかそういう名作は誕生しない。

しかし、もともと移民国家として成立し、現在不法滞在者が1100万人以上もいるというアメリカ合衆国の移民問題の深刻さと、そこから必然的に生まれるさまざまな人生ドラマに焦点をあてた本作の目のつけどころに注目！



日本で政権交代が実現したら？

来るべき2009年8月30日の衆議院議員総選挙で現実視されているのが政権交代。ホントにそれが実現すれば、首相直属の国家戦略局の創設をはじめ日本国の大幅な機構改革が実行されるはずだ。アメリカにおけるI.C.E.の創設も、「日本でもたびたび指摘される縦割り行政の弊害をなくし、効率的な業務の遂行を目的に行われた」らしい。とはいえ、「その最大の目的はやはりテロ対策で、新たに国土安全保障省= D.H.S.(Department of Homeland Security)が設置され、かつて司法省傘下にあった移民局もこのD.H.S.傘下でI.C.E.として編成された。同じ内局には税関・国境警備局や湾岸警備隊などもある」らしい。

I.C.E.の成り立ちや権限、そして現実にI.C.E.が果たしている役割などについてはこれ以上立ち入らないが、1100万人もの不法滞在者をどう取り締まり、強制的国外退去などの措置を講じるかは国家戦略上の大問題。政権選択選挙と言われる8・30総選挙に向けては自民、民主両党とも「ばらまき合戦」が顕著だが、日本における不法滞在者問題、移民問題にどう対処するのかという国家戦略と現実的な政策を、政権交代に向けて互いに示す必要があるのでは？

「正義のゆくえ」は難しい

プレスシートには「捜査官にも人情がある。」「『彼ら』にも事情がある。」という2つのキャッチコピーが踊っているが、本作を鑑賞すればその言葉の意味が心に迫ってくるはず。また原題の「Crossing Over」の意味も、邦題の「正義のゆくえ」の意味もよくわかるはず。まずキャッチコピー前半の「捜査官にも人情がある。」は、人情味豊かな性格であるが故に職務の執行に悩むハリソン・フォード演ずる本作の主人公マックス・ブローガンの姿を示している。

映画全般を通じてマックスが人情味を示すのは、市内の縫製工場の一斉摘発で逮捕されたメキシコからの不法滞在者である若い女性ミレヤ・サンチェス(アリシー・ブラガ)幼い息子を人に預けていることを心配し、マックスにその救助を懇願するミレヤに対して、さてマックスはいかなる対応を？キャッチコピー後半のとおり、「『彼ら』にも事情がある」のは当然だから、I.C.E.捜査官がいちいちそれに人情をかけていてはキリがないが、そこが「正義のゆくえ」の難しいところ。そんな悩ましい問題点を、本作でじっくりと考えてみたい。

どこにでもこんな悪徳公務員が・・・

オーストラリアから米国に渡って大成功した女優代表がニコール・キッドマンだが、本作には第2のニコール・キッドマンを目指し、目下不法滞在を続けている女優の卵クレア・

シェパード(アリス・イヴ)が登場する。彼女にもやっと出演のチャンスが巡ってきたが、それは労働許可を得ていることが条件。そこで彼女はグリーンカード(永住査証)の偽造まで考えたが、それを心配しているのが彼女の恋人で、プロのミュージシャンを目指している南アフリカ出身のギャビン・コセフ(ジム・スタージェス)。ギャビンは結果的に「宗教関係者」と認められてグリーンカードを取得できることになるが、これはたまたま関係者に恵まれただけの話。

それに対し、入国管理局での手続きがうまくいかなかったクレアは、移民判定官コール・フランケル(レイ・リオッタ)との間で起きた交通事故を契機として何とも痛ましい展開に巻き込まれていく。つまり、職権を利用し、相手の弱みにつけ込み、役トクを狙うパターンだが、この場合の役トクとは、美しいクレアの肉体。もちろん、コールだってそのためにお目こぼしをしなければならぬから多少の危険を伴うが、こんな悪徳公務員はやはり世界中どこにでもいるものだ。

もっとも本作が面白いのは、2カ月限定という条件で始まったコールとクレアの肉体関係が続く中、コールの中にある大きな変化が起きること。つまり、ウェイン・クラマー監督はどんな人物も悪玉一辺倒として描いていないから、そこらあたりもじっくりと。

「彼らの事情」 その3は？

彼らの事情その1が、冒頭の一斉手入りで逮捕された女性ミレヤ。そして、その2が女優の卵クレアなら、その3はバングラデシュ出身の女子高生タズリマ・ジャハンギル(サマー・ピシル)とその家族たち。民主主義国家アメリカは言論の自由を保障しているはずだが、敬虔なイスラム教徒であるタズリマが学校で自分の論文を発表すると、それにはブーイングの嵐が。それは、「メディアは9・11の実行犯を怪物や殺人鬼と決めつけるけれど、人間扱いすべきです」と述べたためだが、そんな発言をしたタズリマはイスラム原理主義者？テロリスト？もしそうなら直ちに摘発して強制退去させなければならないが、その判定は一体誰が？

このタズリマを巡る、アメリカ合衆国の扱いはひどいものだ。移民たちの権利を守る闘いを続けている弁護士デニス・フランケル(アシュレイ・ジャッド)が悪徳公務員のコール・フランケルの妻という設定は皮肉だが、デニスの努力をもってしてもできることはせいぜい家族を2つに分け、半分をアメリカに残すこと。その結果、母親とタズリマは強制退去、父親と幼い弟たちはアメリカに残ることになったが、この結論はいかにもつらい。もちろんこれは裁判で闘っても家族全員が強制退去になる可能性が強いと判断したためだが、これをみているとアメリカにおける法の正義は一体どこに？

「彼らの事情」 その4は？

日本でも帰化が認められるのはかなり大変だが、それはアメリカでも同じ。いやそれ以上。また本作をみると、アメリカの市民権を取得するには国家への忠誠という観念がかなり含まれていることに気付くはずだ。「彼らの事情」その4は、韓国人の高校生ヨン・キム（ジャスティン・チョン）とその家族。

ヨンの両親がアメリカでの生活に長年親しんできた結果、ヨンは市民権取得式典への出席を目前に控えているわけだが、ある日不良グループの誘いを断れずヨンがリカーショップへの強盗団に加わったから大変。たまたまこのリカーショップに来ていたマックスの相棒ハミード・バラエリ（クリフ・カーティス）の機転によって、ヨンだけが射殺されなかったうえ、犯行現場にいなかったことにしてもらえる結果になったが、これはキャビンと同じくたまたまのラッキー。「運も実力のうち」と言ってしまうとそれまでだが、自分の主張を堂々と述べた女子高生タズリマが家族の別離という悲しい結果になったことと対比すれば、ヨンの場合は超ラッキー。

不法滞在者が1100万人もいれば、マックスが勤務するI.C.E.の周辺には、1100万通りの「彼らの事情」があるわけだ。

「彼らの事情」 その5は？

ハミードはイラン出身だが、マックスの相棒をつとめていることからわかるとおり、彼ら兄弟はすでにアメリカ帰化していた。そして、その父親も近々市民権を取得できるから、今日はその祝賀パーティーの日。ところが、どんな家族でも1人ははみ出し者がいるようで、ハミードにとっては妹のザーラ・バラエリ（メロディ・カザエ）が心配の種。かなり派手な感じのザーラは目下勤務先の店長と不倫中らしいが、ある日、この2人の殺人事件が発生したから大変。しかも店長の上着には偽造のグリーンカードが。こりゃきっと違法な移民ビジネスが絡んでいるはず。そう睨んだマックスは独自の調査を開始したが、調査が進むにつれて意外な事実が次々と判明していくことに。

既に市民権を獲得したハミード一家にとってもすべてが安心というわけにはいかなかったようで、そこから生まれてくるハミードたちのある悲しい「事情」とは？

2009（平成21）年8月7日記